

二〇一五年十一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年2月号初出の二作品を読みました。
「風船虫」・「秋蟬」

十一月の「森三郎の作品を読む会」では大変うれしいことがありました。中央図書館一階の案内掲示で「秋蟬」をテキストにすることを知って、初めて参加してくださいました方がいらっしやいました。

「秋蟬」は刈谷市教育委員会・中央図書館編の『夜長物語』に収められていて、平成二十六年度の「森三郎 おすすめ童話」に採られています。お孫さんがこの作品で夏休みの読書感想文を書いたので、興味を持って参加してくださいましたのです。

「秋蟬」の話は、尋常小学校六年の秋、担任の先生が、中学への進学者対象に行う予習の希望者を募るところから始まっています。主人公の直は、中学くらいは行けるものと考えて挙手しますが、直の家の事情ではそれはかなわず、小学校卒業後は時計屋に奉公に行くことに決まっていました。いっしょに中学に通うことを楽しみにしている仲良しの俊ちゃんも晴れ晴れとした気持ち、直の複雑な思いとの対比を、「秋蟬」の声を聞く二人の姿に重ねて表しています。短い作品ながら季語の「秋蟬」、ヒグラシをタイトルにして主人公の気持ちを象徴的に示している好感の持てる作品です。

「読む会」の話の中では、突然、中学に行く者を挙手させる担任の先生の配慮の足りなさや、父親が役場勤めで、母親も家で機を織っている、子だくさんの家庭では中学に通えない当時の事情などについて、それぞれの思いが語られました。

「秋蟬」の中では尋常小学校を出てからの進路について、中学へ上がる者、高等科へ行く者、六年だけで学校を下りて家の手伝いをする者を挙げています。

1936年（昭和11年）の統計では、旧制中等教育学校に進学する者は21%、まったく進学しない者は13%、高等小学校に進学する者は66%だったそうです。『事典 昭和戦前期の日本』：制度と実態』百瀬孝 弘文館

中学へは行かれないにしても、勉強だけはしておきたいと思う主人公が、高等小学校へも行けないという実情から、今の子どもたちもいろいろ考えさせられることでしょう。

この会に初めて参加の方も、お孫さんが選んだ「秋蟬」を囲んで、勉強できる環境について、家族みんなで話をしたことです。森三郎さんのお聞きになったら、きっと喜ばれたことでしょう。

「風船虫」も、自分とは違う境遇の子どものことに触れている点は、「秋蟬」と共通点があります。「わたし」はまだ小学校へ上がる前のころ、村のお祭りの軽業小屋で、自分と同じくらいの年の男の子が、三尺くらいの大きな壺の中に入ってグルグル回される芸を見ました。何だかその子をかawaiiように思ったり、自分が毎日あんな芸をさせられる夢を見たりします。次の日偶然出会ったその子に、自分が気に入って持っていた「風船虫」のはいつたピンをやりたくて、黙ってその子のそばに置いてくるのでした。森三郎さんは、自分と同じ立場・境遇の子どもたちだけでなく、社会にはさまざまな境遇の子どもがいることに気づいてほしいと、時々こういう観察眼を少年に与えた作品を書いているように思います。（『笛』・昭和8年2月号、「猿」・昭和8年3月号、「パチンコ」・昭和8年5月号など）

次回予定 平成28年1月8日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和9年4月号初出作品

「トンネル」、「子守」、「餅」